

日本多施設共同コーホート（J-MICC）研究
2021年度 第1回 外部評価委員会（WEB会議） 議事録

日時：2022年2月9日（水）14:00～16:00

出席者（敬称略）：

田島 和雄（委員長）、市川 衛、河村 英徳、齋藤 英彦、森際 康友（以上、委員）、
松尾 恵太郎（主任研究者）若井 建志（中央事務局長）、田村 高志、永吉 真子、
久保 陽子、光田 洋子（以上、中央事務局）

0. 外部評価委員・委員長について（資料なし）

中央事務局長（若井）より、今年度の外部評価委員は2年任期の1年目であることから、委員長を互選し、田島和雄先生を再選した。また、主任研究者交代に伴い、愛知県がんセンター研究所 松尾 恵太郎先生より新主任研究者としての挨拶が行われ、今年度委員に就任した市川 衛委員、河村 英徳委員と他の委員とは初めての顔合わせであることから、出席者の自己紹介が行われた。

1. 2020年度第1回外部評価委員会（2021年2月10日開催）議事録の確認（資料1）

主任研究者（松尾）より、令和2年度第1回外部評価委員会議事録（メールにより委員に回覧の上で確定済）の内容が確認された。

2. 主任研究者、中央事務局長の交代について（資料2）

中央事務局長（若井）より、主任研究者、中央事務局長の交代の経緯、そのための倫理審査手続きの進捗について説明がなされた。

3. 運営委員会、第1回全体会議からの報告（第2回全体会議は不開催）（資料3）

・倫理審査の実施状況

中央事務局長（若井）より、名古屋大学におけるJ-MICC研究全体の倫理審査の実施状況と、前回の本委員会以降の変更点が説明された。共同研究の一覧を新設したこと、研究対象項目その他の拡大（地理情報の追加）、共同研究機関の追加、主任研究者・中央事務局長の交代など組織構成員の変更その他、主な変更点が示された。

・ゲノムコホート研究間の連携について

中央事務局長（若井）より、東北メディカル・メガバンク計画とJ-MICC研究との連携に加え、慶應義塾大学を中心とした鶴岡メタボロームコホート研究、国立がん研究センターが中心のJPHC研究、愛知県がんセンター研究所の病院疫学研究の5つのコホート等の連携について、倫理審査と共同研究契約などが終了し、共同研究の準備を進めていることが説明された。当面はゲノム情報（SNPアレイによるタイピングデータ）と疫学情報

(生体試料以外)の個別データの相互利用を進める予定であり、東北大学のスーパーコンピュータ内にデータをまとめ、同大学またはサテライト端末からアクセスしてデータ解析を実施する方針が述べられた。

・解析テーマ公募について

中央事務局長(若井)より、文部科学省科学研究費(科研費)新学術領域研究「コホート・生体試料支援プラットフォーム」から経費を受けている関係から、科研費による研究を支援することが求められている背景と、進捗状況が説明された。委員長(田島)より解析テーマの公募件数について質問があり、採択された32件以外の不採択はほとんどなく9割程度は採択されている状況が説明された。主任研究者(松尾)より、国内において先行して立ち上がった分子疫学コホートとしてJ-MICC研究が成果を発表していき、公募の必要性にも応えつつ進めていく必要があることが述べられた。

4. 研究費の状況について(資料4)

中央事務局長(若井)より、J-MICC研究の3つの研究費のうち圧倒的割合を占める文部科学省科学研究費(科研費)新学術領域研究「コホート・生体試料支援プラットフォーム」(平成28～令和3年度)が今年度で最終年度となるが、来年度以降(令和4～9年度)も継続が期待されていることが報告された。研究支援代表者との間で議論を進め、今までJ-MICC研究に不足した部分を補強しつつ継続を申請することが述べられた。他の競争的資金は追跡調査実施や検体保存には使えないため、J-MICC研究の基盤は本プラットフォームが今後も中心となることが述べられた。

主任研究者(松尾)より、国立がん研究センター研究開発費の少額予算を用いているが、額が限られているので、継続には分子疫学のJ-MICC研究として成果が出せるよう追加経費の獲得が必要であるという考えが示された。委員より、民間財団からも研究費を獲得する必要があるとの認識が示された。

委員長(田島)より、非常に重要な研究であることから、ぜひ個別の研究費も獲得していただきたいとの意向が示された。またAMEDは非常に支援的であることから、継続して支援が得られるのではないかとの見解が示された。さらにコホート研究の特徴を考えると、継続することの重要性は誰もが認識しており、より安定的かつ長期間の支援を得られるシステムがあるべきとの感想が述べられた。

5. 各種委員会の開催状況(資料5)

中央事務局長(若井)より、昨年度からの委員会、会議の開催状況が報告された。

委員長(田島)より、Web会議での不自由がないかとの質問があり、意見が出にくい(発言者が偏る)、世代を超えた交流の機会がなくなる、対面会議でないと難しい場面もあるため、今後状況に合わせて、対面でも開催できるのが望ましいとの意見が主任研究者、中央事務局長から出された。

6. ベースライン調査、第二次調査の進捗状況(資料6)

中央事務局長(若井)より、ベースライン調査および第二次調査について、大部分の調査が終了している状況が報告された(ベースライン調査はJ-MICC連合を含め約105,000名、第二次調査はJ-MICC連合を含め約61,000名)。また中央事務局で保管している生体試

料数（J-MICC連合含む。ベースライン調査参加者のDNA約94,000名分、血清試料約85,000名分、第二次調査参加者の血清試料約37,000名分）が示された。

7. 追跡調査の進捗状況(資料6・7)

中央事務局長（若井）より、死亡およびがん罹患追跡調査の進捗状況、および全死亡数（約8,000名、地区独自研究分を含む）、死因（死亡把握の2-3年遅れで判明。6割程度ががん死亡）、がん罹患（研究参加者の約1割）の内訳が報告された。委員より、遺伝子測定の不同意が多い理由について質問があり、主任研究者（松尾）より、愛知県がんセンター研究所では、病院受診者全員を対象とし、アンケートのみの参加も受け入れたことにより、診療で採血の予定がない者では採血を行わなかった例が多いためであると回答された（配布資料の注参照）。

8. J-MICC全体研究の進捗状況(資料8)

主任研究者（松尾）より研究の進め方の大枠と進捗状況が説明され、ベースラインデータによる横断研究、Candidate gene approach, GWAS横断研究、追跡データ・第二次調査データによるコホート研究の違いについて説明された。

9. 共同研究の実施状況(資料9)

中央事務局長（若井）より、J-MICC全体研究と外部共同研究者との共同研究の枠組、現状が報告された。とくに「オーダーメイド医療の実現プログラム」において、バイオバンクジャパンの参加者（患者）と比較するため、J-MICC研究から対照となるDNA試料、データを提供し、49対象疾患中16編の論文が採択されたことが報告された。その他、国際コンソーシアムへの参加、がん早期診断マーカー検証の公募等、進行中の共同研究が報告された。

委員長（田島）より、膵臓がんの早期診断マーカー（採択5件）の有望性について質問があり、中央事務局長（若井）より見解が示された。遺伝子変異に対応した治療（オーダーメイド医療）、現場での患者とのコミュニケーションについて質問があり、一般住民を対象の中心としたJ-MICC研究の位置づけについて説明された。実用化に向けて、疫学者以外の専門家との共同が必要であるとの見解が示された。

10. 学会・論文発表状況(資料10)

中央事務局（田村）より、学会・論文発表状況が示された。

委員長（田島）より、発表論文をリストアップするだけでなく、どれだけのインパクトがある論文が出て、社会に還元できる成果が出せたかも示してほしい。国際コンソーシアムの成果など、論文の注釈を付けて見せていただけるとうれしいとの要望が出された。

主任研究者（松尾）より、J-MICC研究は分子疫学としては規模が大きくはないため、アピールできるようにハイライトできる成果を示していきたい。また予算獲得のためにも成果を分かりやすく示す必要がある、またインパクトファクターよりも被引用数を指標とするなどの提案については、（5年間ほどで徐々に上昇する）疫学領域の被引用パターンを考慮し、J-MICC研究内で論文を引用し合うことも検討するとの回答がなされた。

委員より、成果の公表内容は次に獲得できる研究費と密接にリンクするため重要であるとの意見が述べられた。被引用数のように定量的にも示せるが、多くの論文を羅列することは何も言っていないことと同じであるため、「今年の一押し論文」など「これぞ！」と

いう成果を示すことで、研究の方向性を示すことにつながる。そのような方向性が示されれば、外部評価委員としても成果をどう広めたら良いかについてコメントしやすくなるとの意見が出された。

委員から出された、投稿数を示すことで努力を見せる提案については、主任研究者（松尾）より、投稿数と採択数を算定するのは難しい（とくに公募による研究テーマの場合）ことが説明された。今後著名なジャーナルへ投稿できる体制を整えていく意向が示された。

11. J-MICC研究ホームページについて(資料11)

中央事務局（田村）より、J-MICC研究ホームページが紹介され、構成やJ-MICC研究の広報活動の一環であるJ-MICC Plus（J-MICC研究の論文の一般向け要約）等、掲載情報の更新状況や、全国がん登録情報利用に関するオプトアウトページの追加、アクセス数等について報告された。

委員長（田島）より、本委員会でのこれまでの議論でかなり内容が充実してきたとの評価が示された。また、研究者間での情報共有、参加者との情報共有について質問があり、J-MICC研究は多数のコホートの集合体であることから、参加者との直接のやり取りは難しいと回答された。

委員より、J-MICC Plusの対象者は誰かを意識し、さらに「中学生にも分かる」という基準で文章表現をするとより良いコンテンツになるとの意見が出された。また、各地区でのプレスリリースについても、J-MICC研究としてプレスリリースを出すのが良いのではないかと意見が出された。

12. その他(資料12)

主任研究者（松尾）より、来年度は委員の任期最終年度（2年目）にあたるため、ぜひ引き続き委員をお願いしたい旨が伝えられた。委員より任期の確認があり、1年任期の愛知県医師会推薦の委員（河村委員）以外の委員には、令和5年3月までお願いしたい旨が依頼された。